

センシャってなに？ ユカリさん

扉行広

「カモさん、アリクイさん、レオポンさん各チームは横隊を保って押し出してください。カバさんチームは後方から援護射撃。アヒルさん、ウサギさん先行します、続いてください！ 全車突撃！」

大洗学園戦車道グループ、今日は七両がかりでの攻撃訓練だ。四号戦車から身を乗り出したみほの指示で、いつせいに前進し始める。通信手の沙織が氣勢を上げる。

「いつけえー、総攻撃だ！」

前進する七両に向かって、前方に点在する茂みから、どかん、ぼかん、と間歇的に砲弾が飛んでくる。標的役の生徒会チームの攻撃だ。すかさずみほが指示を出す。

「先行組、回避運動！ カバさん、反撃してください。当てなくていいです！ レオポンさんは——」

「さすがに七両の指揮を取るのは大変そうですね、みほどの」

次弾を抱えて見上げる優花里に、みほが苦笑してみせる。

「うん、もういっぱいいっぱい。頭がパンクしそう」

「そろそろ澤さんにも実戦の小隊指揮をさせては？」

「そうだね……って、それ考えるのも大変だよお」
先行組が蛇行して回避を始め、横隊組が装甲で砲弾を弾いて追隨する。どん！ と三突が発砲すると、生徒会のヘツツアアが茂みから飛び出して、ちよこまかと逃げ回る。

今回は勝敗度外視の隊形訓練なので、このまま全体の形を保ちながらヘツツアアを追い続ける、という手はずだった。

とところが思わぬことが起こった。
岩陰でくるとこちらを向いたヘツツアアが、やけに慎重に狙いを定めて発砲する。カーン！ と音高く当たったのは——なんと四号戦車のキューポラだ。

「きやう！」

衝撃を受けたみほがごつんとハッチに頭をぶつけて、ずるずると車内に滑り落ちてくる。ぐったりとしてしまった姿を見て、優花里が愕然とする。

「み、みほどの!」「みほさん!」「ええっ？ ちょっと、中止——訓練

中止！」

沙織の叫びが響き渡り、戦車の群れが動きを止めた。

「軽い脳震盪ですね。CT画像には異常は出てませんし、一晩様子を見てても何もなかったの、まあ大丈夫です」

翌日、学園艦の病院を訪れたあんこうチームに、医師がそう告げた。四人はほっと胸をなでおろしたが、続いて気がかりなことを教えられた。

「ただ、医学的には問題ないんですが、少しだけ記憶の混乱があるよう……」

「記憶の混乱？」

「ええ。お会いしてみてください」

病室に通された四人が見たのは、ガウン姿でベッドに身を起こしているみほだった。「あ、みんな」と明るい顔で微笑む。駆け寄った優花里が手を取る。

「みほどの、大丈夫ですか！」

「うん、大丈夫だよ。ちよつとたんこぶで来ただけ。心配かけてごめんね、ユカリさん」

「そんな！ みほどのがご無事でよかったです」

「河島先輩が謝ってましたよ。まさかほんとに当たるとは、つて」「こういうときだけ当てるんだからな、あの人」「困った人だよね」

うなずき合う三人の前で、優花里が目尻をぬぐって、みほの手を握りなおす。

「ゆつくり休んでくださいね。訓練の続きはまた明日からってことで」

「訓練？」

「はい。今日はみんなで戦車の手入れをします」

「センシャ？」

様子がおかしい。みんなが顔を見合わせる中、優花里が確かめるように尋ねる。

「はい、戦車の整備です。——みほどの？」

「センシャの……せいび？」

首を傾げたみほが口にしたのは、信じられないような一言だった。

「センシャって、なんだっけ？」

「はあ……おっかしい」

翌日、格納庫で四号戦車を前にしたみほが、馬鹿みたいに口を開けて手を

触れた。

「鉄の塊だねー。とつても頑丈そう。なんか、タイヤ？ がいっぱいある……鉄くさい」

ぐるりと一周してから、75ミリの長砲身を指さして、振り返る。

「棒が出るね。変なの」

見守る大洗メンバーが、一人残らず目を点にした。

「に、西住隊長……？」 「どうなってるの？」 「なんかのジョークじゃないんですかあ？」

「西住い、しっかりしろ！」 河嶋桃が駆け寄って、肩を揺さぶる。「何を寝ぼけたこと言ってる？ 戦車だぞ、戦車！ 貴様が乗りこなして来た四号だ！ 忘れたのか？」

「え、ええつと……よくわかんなくて」

「貴様、いくら私に撃たれたからって、そんな当てつけみたいなことしなくても——」

「やめてください、河嶋先輩」

「わ」

優花里が横からみほの肩を抱きよせて、桃をにらむ。

「みほどの頭を打ったショックで、本当に戦車のことを忘れてしまわれたみたいなんです。当てつけでやってるわけじゃありません！」

「そんな馬鹿なことがあつてたまるか！ 演技に決まってる！」

「演技なんかじゃないんです。みほさん、上がつてきてもらえますか」

車長ハッチを開けて中から姿を現した華が、みほに呼びかける。

「う、うん」

うなずいたみほは四号に手をかけるが——その場所は左の起動輪のあたりだ。手掛かりのないそこに無理やりしがみついて、「んっしょ……あ、あれっ、これどうやって上るのかな……んつと……」と、ナマケモノみたいに不器用に這い上がるようにする。

一同は啞然とする。いつものみほだったら、砲手ハッチ下のはしごや、フロントの傾斜に足をかけて軽々と駆け上るはずなのだ。

じたばたと車体上がったみほは、「やっ」と登れた。わ、高あい「無邪気に笑ったものの、そこでみんなの視線に気づいて、「えつと……なんかまずかった？」と不安そうに笑った。

戦車に上るといふ、簡単なことをさせただけでわかった。そこにいるのは明らかに、みんなの知っている頼もしい隊長の姿ではなかった。

「隊長……」 「西住さん……」 「か、会長お。これ、どうしたら……」

「はあー、見事に忘れちゃってるみたいだね、西住ちゃん」

小山柚子の困惑しきつた声を受けて、干し芋片手に眺めていた角谷会長が苦笑する。

「これってなんか治療法あるの？ 秋山ちゃん」

「はあ、それが……」

「失認症というやつらしい」 言葉を濁した優花里の代わりに、勉強家の麻子が補足する。「他の部分はなんともないのに、ある事柄だけがすっぽりと認識できなくなる状態だ。人の顔が見分けられなくなる相貌失認とか、読み書きできるのに人の声がわからなくなる言語失認、見えているのに左右の片側がわからなくなる半側空間無視なんてのもある。それで言うと、これは戦車失認だな」

「といつても、器質的な損傷があるわけではなくてですね。お医者さんによれば、心理的なものだ。ですから見守るしかないみたいで……」

「ふーん、まるで中島敦の名人伝だね。まあ見守れつというなら、そうすつか。任せていい？ あんこうのみんな。手伝えることあつたら手伝うからさ」

「は、はい。もちろんです！」

懸命に胸を叩いて請け合う優花里を、戦車の上のみほが、心細そうに見つめていた。

とはいえ、隊長という最重要ポジションの人間が認識をなくしたのは、見守つていれば済むことではなかった。

ひとまず車長席に座らせて四号を動かそうとしたものの——。

「みほどの、役割は思い出せますか？」

「う、うん。何をすればいいの？」

「みんなに命令を出すんです。前進とか後退とか」

「じゃあえーつと、前進！」

「あつ、その前に周囲の確認をしてくね、状況を把握して……」

「周囲？ 周囲って、えつ、窓がないよ？」

「クラッペとキューポラの視察口がありますから！」

「くらっ、きゅ？ あつこれ？ わあ、外が見える。なんか他にも四角い箱がいっぱいあるよ。あれもセンシヤ？」

「だ、だめですこれは……」

仕方がないので、あんこうのメンバーが一人ずつ交代してみたが——。五十鈴華隊長と西住砲手の場合。

「皆さん、よろしいでしょうか？ では前進……あつ、前方六百メートルに敵です！ 撃ってください！ 撃つて！」

「えっ、なにになに？ どこ見るの？ この筒？ 撃つてなに？ えっ引き金？ って？」

冷泉麻子隊長と西住操縦手の場合。

「全車、前進。カモさんアクリクイさんレオポンさんは三十メートル間隔で斜行陣を作り二十五キロで併進、アヒルさんウサギさん右側面から先行し四十五秒後に発砲ただし着弾は散らせ、カバさん右前方八度の方角九百十メートルに照準して待機」

「細かすぎてできませんーん！」 「ていうかあんこうも動いてください！」

「ええっギア？ アクセル？ 踏むのこれ？ って止まっちゃったけど？」

武部沙織隊長と西住通信手の場合。

「だーいじようぶ私だつてみぼりんのやり方ずーっと見てたんだかね、みんなー適当にまとまってる斜め前に前進！ あつほらあそこに敵いるよ！ 違う違うそつちじゃなくてこつち！ ほら、あれ！」

「あつちとかそつちではわからん！ 異の方角か？ 乾の方角か？」 「あつはっは、武部さん可愛いよねー」

「チャンネル？ えっとカバさん？ カモさんつて、どれ？ もしもし、聞こえますか？」

そして秋山優花里隊長と西住装填手の場合。

「小隊に分けます！ 第一小隊はフラッグ周りに固まってください。第二小隊は警戒前進！ 敵を視認しても発砲はせず報告して！ タイミング取って一斉に撃ちます！」

「あー、これならまあなんとか……」 「いけそうかも？」

「敵発見？ よーし砲撃準備！ あんこうに合わせて一斉に撃ちますよ……一斉に……一斉に……あの、みほどの。それ砲弾が前後ろです！ 逆さに装填しようとしないうでください！」

「え、ええっ？ どつちが前？」

みほも仲間たちもうまくいかず、さんざんの体たらくで一日が終わった。疲れ切つて帰り道を歩きながら、沙織が愚痴をこぼす。

「ふえええ、ダメダメだったね。私たち、こんなにダメだったんだ」

「というか、それだけ普段の西住さんがずば抜けていたことだろう」

「天才のあんたが言うどシヤレになんないよ麻子……」

「あの、みんな……」

四人は振り返る。一歩遅れてついできたみほが、しょんぼりと肩を落として

てつぶやく。

「ごめんね、私……なんにもできなくて」

「そ、そんなことないよ、みぼりん頑張つてたよ！」 「仕方ないですよ、いつものみほさんではないんですから」 「そうだ、誰だつて不調の時はある」

「あのつ、みほどの」優花里が手をつかんで顔を突き出す。「今日は、うちに泊まりに来ていただけませんか」

「えっ？ ユカリさんのおうち？ いいけど……ご迷惑じゃない？」

「とんでもない。きつと思ひ出させてみせます！ 皆さん、みほどのをお預かりしていいですね？」

「ええ、もちろんです」 「頼んだよ、ゆかりん！」

「おじゃましまーす……わあ、いっぱいある」

優花里の両親にあいさつしたみほが、まるで初めて訪れたかのように、お

ずおずと部屋に入ってきて、物珍しげにあたりを見回した。優花里はコレク

ションのひとつ、クロムウエル戦車のプラモを手にとって見せる。

「これ、わかりますか？」

「う、うん。センシヤだよね」

「これは？」

「これもセンシヤ？」

履帯も砲塔もないフンクワーゲンのプラモの前に、みほは少しだけ自信な

さげに言う。やっぱりだ。みほは本当に戦車がなんだかわからなくなつてい

る。

しかしそれよりも恐ろしい想像があつた。優花里はさらにもう一つの大切

な品物を、みほに差し出す。

「これは？」

「センシヤ……かな」

血の気が引くような気がした。みほはボコ人形を差してそう言ったのだ。

「違つた？ あはは……その、わかるものとわからないものがあるんだよね

それで、わからないものはセンシヤだつて言われるから、これもセンシヤな

のかな、つて……」

申し訳なさそうに、でも仕方なさそうにみほが笑う。優花里はたまらなく

なつた。

「みほどの——」

「えっ？」

両手でみほの二の腕をつかむと、引き寄せて、唇を重ねた。

「んっん」「んう!？」

みほが目を丸くして固まる。柔らかな唇からツツと口を離すと、優花里は尋ねる。

「……これは、わかりますか？」

「キス……」みほは呆然とつぶやいて、唇に指をあてる。「ユカリさん、どうして？」

「……やつぱりそれも忘れちゃってたんですかっ!」

胸を引き絞られるような痛みで襲われて、叫んだ。

おかしいと思っていた。ユカリさん、という呼び方が、変に他人行儀なのだ。いつものはずむような、甘えるような親しみが消えていた。

「私たちのこと、わかってないんですね、今……」

「私たち……」頬を赤く染めながらも、まだ戸惑ったようにみほがせわしくまばたきする。「私と、ユカリさん？ これって……もしかして？ つ、付き合ってた？ 女の子同士で」

こくん、と小さくうなずくのが精いっぱいだった。そんなこと、今さら口に出して説明したくはなかった。

「そ、そうなんだ……」うつむいたみほの顔が、ふんわりとほころんでいるのが救いだ。けれども、出てきた言葉は嬉しいものではなかった。「うん……うん、いいよ。私、たぶん、ユカリさんのこと好きだったと思うよ。いやじゃないもの。ほっとしてる……」

——なんで過去形なんですか。

言葉を口に出す寸前で呑みこむ。おとぎ話じゃあるまいし、キス一つですべてを思い出したりするわけがなかった。

「もうちょっと頑張ってみましょう。思い出してもらえるかもしれませんから……」

その夜、優花里は部屋にあるものを片端から、みほの手に取らせていった。最初は思い出させるつもりでやり、それが無駄だとわかってからは、せめて名前を覚えさせようとした。

だけど、無駄だった。みほはどうしても、戦車と弁当箱、戦車と一眼レフカメラ、戦車とスニーカーが見分けられなかった。それだけでなく、ポコとスニーカーの区別もつかなかった。

さすがに人間である優花里のことはきちんと認識していたが、それでも会話を重ねるにつれて、異常が表に現れてきた。腕が触れ合っても平然としている。逆に、何気なく髪を撫でてくれない。するりと風がかすめるように、肩を嗅いでくれたりもしない——。

「後で……仲良くしますか？」

「ん？ 今もうしてるじゃない」

その質問にも、屈託なく笑うだけだ。二人の言葉が通じない。照れくさそうに頬を染めて、「う、うん、する？」と聞き返してほしいのに。

——私たち、そのていどの間柄じゃないんですよ、みほの……。

すべてが徒労に終わって、物悲しい気持ちで一緒の布団に入ると、みほが申し訳なさそうに言った。

「ごめんね、ユカリさん……こんなに頑張ってくれたのに、私、わかんなくて……」

「ううん、いいですよ。仕方ないです……」

「……あの。ユカリさんは、センチヤが大好きなんだよね。それで、私もセンチヤがすごく得意だった……」

「だからなの？ だから私が、好きだったの？」

並べた枕の上で、顔を見合わせる。みほが彼女なりに真剣に、でも決定的に何もわかっていない顔で、すがるように見つめている。

「センチヤじゃなくなつた私を……まだユカリさんは、好きなのかな……」

「——ああ、もうっ!」

優花里はしやにむにみほを抱き締める。

——聞くまでもないじゃないですか、そんなの!

それを聞かずにはいられないほど弱気になってしまったみほが、痛々しくてたまらなかった。

やがて腕の中のみほが寝息を立て始めたころ、優花里はあることを心に決めていた。

みほが失認したのは戦車じゃない。心の中の「一番大事なものを、ごっそりと見失ってしまったのだ。認めるのは悔しいけれど、自分はその片隅の一つでしかなかった。取り戻すというなら、戦車もポコも自分も、丸ごと含んだ大きな何かを取り戻さなければ意味はない。

だったら、頼れるのは、自分よりずっと大きなものしかない。みほの中に、自分が現れるよりも前から、深く根を下ろしていたもの。

それは——。

優花里は片手を伸ばして携帯を取り、メールを打った。

「話はすべて聞いた。みほ、おまえは戦車道をすっかり忘れてしまったそう

だな」

「は、はい……」

座敷の机を挟んだ年上の娘の凛とした眼差しを受けて、みほが肩を縮める。その隣の優花里も、背筋をピンと伸ばしてカチコチに緊張している。

熊本県、西住本家。優花里の相談を受けて詳しく話を聞いたみほの姉、西住まほが、ただちに旅路の手配をして、二人を呼び寄せたのだった。

「すでに袂を分かったとはいえ、おまえは大切な妹だ。西住の者にとつて人生そのものである戦車道を失ったとあつては、見過ごしにはできない。それを取り戻すためならば、あえて手助けしてやろう」

「お姉ちゃん……」

「その方法だが」ちらりと優花里に目をやって、まほは卓上の茶をひとくち含む。「そちらの秋山さんに聞いたところでは、戦車を見せたり訓練に同乗させたりなどの手立ては一通り試したそうだな。また、薬や手術なども意味がないと」

「う、うん。そう聞いているけど……」

「であれば、手はひとつ」カン、と作法を無視して音高く茶碗を置くと、まほは強いまなざしを向ける。「訓練ではない、試合を行う」

「試合——ですか」優花里がごくりとつばを飲み込む。「いきなりそれは乱暴なのは……?」

「秋山さん、戦車道は厳しい武道だが、乱暴な行いではないぞ。よしんば百歩譲つてそうだとしても、乱暴でない方法はもう残っていないだろうか?」

「しかし、今のみほどのに、それはちよつと……」

「ううん、私、やる」首を振って、みほが身を乗り出す。「ユカリさんや、みんなや、お姉ちゃんのために。私、挑戦してみる」

「いい心がけだ」にっこりと笑つたまほが、不意に険しい目つきになる。

「——が、やるからには徹底するぞ。過ぎし日の西住流戦車道の鍛錬、そっくりそのまま再現するからな」

「つていうと——」

「すでに、メンバーは揃えた」

まほの言葉とともに、すつと襖を開けて、現れたのは、つややかな銀髪を肩に流した勝気そうな少女と——厳しい眼差しをたたえた、黒衣の女性だった。

「逸見……エリカ殿?」

「お母さん……!」

「西住といえは私よりもまずお母さまだ」まほがニヤリと笑みを見せる。

「ひと肌脱いでくださるそうだ。みほ、覚悟を決める」

「久しぶりね、みほ」西住戦車道師範、西住しほが無表情に言う。「自分だけの戦車道を見つけたと聞いていたのに、忘れたとは不甲斐ない。ここはひとつ、思い出させてあげましょう」

「全車、配置につきなさい」

低い、だがよく通る声の命令を耳にしながら、優花里はかつてないプレッシャーに、まつ毛の一本まで緊張しきっている。

右斜め後ろの車長席に座るのは、これまで顔を合わせたどの戦車乗りよりも恐ろしい人物——西住しほその人だ。

それだけではなく、優花里自身も普段と異なる砲手の席に置かれていた。代わりにエリカが装填手を務め、まほが通信手、みほが操縦手の席に着いている。

戦車は大洗のあんこうチームと同じ、四号D型だ。西住本家にうなるほどある戦車の中から、同じ車両が六両も用意された。しかし頼りになりそうなのはそれだけで、あとは何もかも違う。

本家近郊演習場に黒森峰生徒を呼びつけての、3 on 3 のフラッグ戦。たとえ撃破されても死にはしないのは確かだが、そんなことは気休めにもならない真剣勝負の気迫が、戦う前から場に満ちていた。

「わ、私……」

振り向いたみほの声も肩も、震えている。その顔に、真後ろの席の優花里は力強くうなずいてみせる。今この場でみほを支えてやれるのは自分だけだ。何があつても見捨てたりしない、という思いを込めて見つめる。

その眼差しを受けてこくんとうなずき、みほは前を向いた。

しほが訓示する。

「よいですか。撃てば必中、守りは堅く、進む姿は乱れなし。鉄の掟と鋼の心と、金剛石の友の絆。それが西住の神髄です。それを体得できない者には、何の価値もない」

噂通りの厳しい言葉に、優花里は肩が沈むような重さを感じて——ふと、気づく。

今の文句は、少し違うような……?

「では、一同よろしくお願いします。——パンツァー・フォー!」

礼に続く、鞭打つようなしほの命令が、些細な気がかりを吹き飛ばした。ぐらつと走り出した戦車が、いきなりガクンと前にのめる。エンストだ。

「ご、ごめんなさい!」と早口に叫ぶみほを、隣席のまほが叱咤する。

「忘れてるのはわかってる。回し気味でつなげ！ 噴かせば止まらな
い！」

「わかった！」

ぐおおん！ と十二気筒が唸りを上げ、四号は前に飛び出した。

「楔形隊形で直進。中間地点の市街地へ入ります！」

「了解、二号車、三号車、左右を固める。全速力！」

しほの指示をまほが無線で伝達する。続いて「主砲装填、榴弾！」と命令を受けて、エリカが流れるような動きでラックの砲弾を装填する。いつもと違う戦車のはずなのに迷いが無い。

優花里の視線に気づくと、「何か文句でもあるの？ 装填手」とささやいた。

「ありませんよ。手慣れてるなと思ったんです」

「黒森峰の生徒はひと通りドイツ車の訓練を受けてるのよ」

「そうなんですか。うらやましいですね」

「すかしたと言わないで！」

「エリカ」
まほの一言で、エリカがびたりと口を閉ざした。優花里は笑いかけて、こらえる。

市街地に入ると、笑うどころではなくなつた。

「砲手、前方の白いビルの壁面を照準、直ちに撃て！」

「ビルですか？」いきなり何を、と思つたが、しほの静かな眼光を受けて疑問が蒸発する。「了解！」

発砲。砲弾が飛翔して炸裂し、コンクリートの壁がガラガラと崩れる。

「よろしい。二号車と三号車、ビルの左右につけ！ 本車は崩れたビルの瓦礫に隠れる！」

「は、はい！」

速やかに位置についての僚車を追つて、みほが懸命に操縦桿を動かし、車幅感覚をつかんでいないのが丸わりのぎこちない動きで、瓦礫を盾にした。

「徹甲弾装填！ 主砲照準、左前方商店の角！ 俯角を取って、来るぞ！」

言われたとおりの場所に、敵チームの戦車が飛び出して来た。レティクルにびつたりと起動輪が入り、まさにそのタイミングで「撃て！」と命令があつて、優花里は引き金を引いた。履帯がちぎれ飛ぶ。敵の動きを読み切つたしほの指示に、優花里は舌を巻く。

しかしそれは、こちらのフラッグの位置を教える攻撃でもあつた。前方左右、まだ見えない位置から、立て続けに着弾が集中した。ずがん、がつん！

と遮蔽物となつた瓦礫が吹き飛ぶ。そのためにビルを崩したのだと優花里にはわかるが、みほは悲鳴を上げている。

「ひやあつ！ こ、怖い！」

「操縦手、小刻みに前後運動！」容赦のないしほの指示が飛ぶ。「車体をちらつかせなさい。怖気づくな！」

「は、はい！」

慣れないままの手つきでみほが操縦桿を動かし、がくがくと車体を前後させた。二撃目、三撃目が飛来し、一発は車体に当たってギイン！ と背筋の寒くなるような金属音を上げた。

「ひい！」

「すつとろい動きしてんじゃないわよ、あんたはそうじゃないでしょ！」

「だ、だつて、この箱が撃たれて」

「箱じゃない！ 戦車を箱だなんて呼ぶな！」

罵倒するエリカに言い返したくなるのを、優花里は懸命にこらえる。

街角を舞台にした激しい撃ち合いが続いたが、じきに変化が起こつた。前方の物陰を横切る敵車がちらりと見えたのだ。それを逃すしほではなかつた。「盾を作れ！ 砲手、十時方向に照準！」

「二号車、前に出る！」

間髪入れずまほが車長の意を汲んで指示を出し、僚車が飛び出す。次の瞬間、その前方に現れた敵車が、二号車を撃ち抜いた。砲撃後の空白が生じ——優花里の前には絶好の盾と、装填済みの主砲があつた。

「撃て！」

二号車越しに徹甲弾の一発。一両を撃破した。

「残り二両！」

履帯を切つた一両と、無傷の一両が残っている。止まっている方がフラッグだから、それを仕留めれば勝負はつく。だが建物の位置が悪くてどちらも狙えない。

しかしみほが別のことに衝撃を受けているのに優花里は気づいた。

「お姉ちゃん、今の——」

「みほどの？」

振り向いた彼女と一瞬目が合う。優花里はかすかな希望を抱く。

——まさか？

「あと一撃です！」しほの鋭い声が車内を圧する。「フラッグに一撃を当てればけりがつく。その時間は作れる。砲手、当てられるわね？ あなたもあんこうでしよう？」

「はい！」優花里はスコープを覗くが、頭の中では別のことを考えている。——もしかして、みほどののは。

「三号車を盾にする！撃たせて撃て！」

「了解。三号車、右へ出ろ、撃たれてくれ！」

「は、はい！」

緊張しきった声で、それでも忠実に従う僚車の返事を聞いたとたん、みほが叫んでいた。

「違う、それじゃみんなで勝つことは——」

「行け！」

まほの声とともに、三号車が突進した。

次の瞬間、優花里は自分たちの戦車が期待通りの動きをするのを感じていた。

飛び出した三号車が、見えない敵の一発を受けて履帯を破壊され——。

そこへとどめを撃ち込もうとした敵フラッグの前に、こちらの車両が滑り込んだのだ。

命令を無視して自車を前に出したみほが、叫ぶ。

「優花里さん！」

「はいっ！」

その位置に車両が出て、そこに敵弾が来ればいいと、優花里はとっくに願っていた。希望通りの展開に合わせて、十度だけ砲塔を横へ傾ける。

ガキン！と自分の頭の横で徹甲弾が跳ねる音を聞きながら、主砲を正面に向けなおす。

弱点である正面視視口が目の前だった。しほが叫ぶ。

「撃て！」

砲声。そして、白旗が上がるのが見えた。

硝煙のたなびく戦場に四人が降りた。最後の一人が現れるのを待ち受ける。

その一人は、操縦手ハッチを押し開けて姿を現した。みほが車体の上に乗って、ゆっくりと仲間を見回す。

しほが声をかけた相手は、優花里だった。

「秋山さん、最後の『よそ見』は見事でした」

「は、はい」優花里は気を付けをして答える。「正面からの被弾では貫通されてしまいましたが、わずかに角度を取れば砲塔横の傾斜で弾けると思ったので——」

「しかし私は命じたはずですよ。二号車を撃たせろと。それに合わせた動きで

はなかつたわね」

「はい……申し訳ありません。命令に背きました」

「秋山さん、それは——みほが前に出るとわかっていたから？」

「ええ、そうです」うつむいていた優花里は顔を上げる。「みほどの仲間を見捨てません。少なくとも他に方法があるときは。そして今の戦闘では：二両で一発ずつ受ければ持つかもしれないませんでした。そう思われたはずなんです。以前のみほどのならば——」

「みほ」しほが目を移す。「あなたがいきなり前に飛び出したら、秋山さんがタイミングを外すかもしれないなかった。そうは思わなかったの？」

「私……思わなかった。こうやったら、あんな仲間はこうするはずって、自然に思ってた……」まだぼんやりした顔で、みほは自分の両手を見下ろす。

「無意識に動かした。操縦桿を。アクセルを。ギアを——」

「みほ」

「はい」

呼びかけたまほが、試すような目で見つめながら、みほが立っているモノをコンと叩いた。

「これは、なんだ？」

「戦車」

みほは反射的に答えてから、戦車、と口の中で繰り返して、目を丸くする。

「これ……！」

振り返って砲塔に両手をつく。主砲を、キューボラを、確かめるように撫でまわして凍り付く。

優花里はフロントを駆け登って、その肩を抱く。

「みほどの、大丈夫ですか？」

「これ、これ……！！大洗の、私たちのと同じ……せん、しゃ？」

「ええ、ええ。そうです。これは？」

ポケットから取り出した小さなボコ人形を目にすると、ううつと声を詰まらせて、みほは優花里に抱き着いた。

「私が、好きなもの——！！」

抱擁を、しっかりと優花里は受け止めた。

足元で、こぼんと咳払いの音がした。振り向くと、敵味方の黒森峰の生徒たちが集まっており、その中から、エリカが苦虫を噛み潰したような顔で見上げていた。

「仲のおよろしいところ悪いんだけど、あなたたち——」

「は、はい？」

「ひとつ言っておきたいのよ。家元と隊長が僚車を捨て駒にしたアレ、わざとだから」

「えっ?」「おい、エリカ——」

手を伸ばしたまほに、言わせてください、と振り向いてから、エリカがみほをにらむ。

「あなたに記憶を取り戻させるためには、何よりも昔の西住流の厳しいプレッシャーが必要だと、隊長が判断されたからよ。そのためにお二人はあえて汚れ役を買って出た下さったの。あなたたちだけで解決したみたいに思わないでほしいわね」

「そ、そうだったの……」「じゃあ、逸見殿の罵倒も、そういう意図だったんですかね?」

優花里は他意なくそう言ったのだが、エリカは「あれは」と顔を赤らめて髪のをひねった。

「まあ……そう思ってくれると助かるわ」

戸惑う優花里の横で、みほがまばたきしてエリカを見る。

「なんか、感じ変わった? エリカさん」

「知らないわよ!」喚いてから、そっぽを向いてつぶやく。「しいて言えば西住流のモットーが変わったのよ。それに従ってるだけ」

「あ、そういえば。金剛石の——って」

二人は、黒森峰の生徒たちの顔を渡して、気づく。

みんな笑顔だ。昔の雰囲気とはずいぶん変わっていた。

生徒たちの後ろで眺めているしほに目をやると、うなずきが返ってきた。

「西住流とて、変わるときは変わります。前に進むとはそういうこと。——みほ、みんなあなたのために一役演じてくれました。感謝するように」

「みんな——」みほは立ち上がって、頭を下げる。「ありがとうごさいました! 私なんかのために」

いちいち卑下するんじゃないわよ! とかなんとか言いかけたエリカの肩を、まほが軽く叩いて後ろへ引いていった。優花里はみほの腕に触れる。

「さあ、大洗のみんなにも連絡しましょう。もう大丈夫ですよって」

「うん、そうしなきゃね。でもその前に——」

ふわりと顔を寄せたみほが、優花里さんと、と耳元で甘くささやく。

「思い出したよ」

「みほどの……」

「ただいま。ありがとう。ごめんね」

優花里は声を詰まらせて、大きくうなづく。